

第47回日本伝統獣医学会・一般講演

術後ならびに各種疾患の 疼痛コントロールに有効と思われる SRD-P 401の作用 Effect of SRD-P401 on pain control after surgical operation and other diseases in small animals

豊永眞弥¹⁾、小松靖弘²⁾

Shinya TOYONAGA¹⁾, Yauhiro KOMATSU²⁾

1) とよなが動物病院、2) サン自然薬研究所

1) Toyonaga Animal Hospital

2) Sun R&D Institute for Natural Medicines Co Inc.

はじめに

疼痛コントロールが注目されている昨今、オピオイド、非麻薬性の鎮痛剤、ステロイドやNSAIDs、サプリメント、漢方薬など様々な種類の薬が使用されている。なかでもSRD-P401はSRD-P001の改良新処方製剤で、従来配合処方からはCOX-Iの抑制が十分に考えられるが、加えてCOX-IIの抑制効果を示す生薬エキス、クチナシの実のエキス、樟芝菌糸体粉末を配合して、COX-IとCOX-IIの阻害活性を強化して、P001より明確に抗炎症効果が発現し、また、抗アレルギー効果が発揮できるようにも考慮した処方考えられている。そこで今回、術後ならびに様々な痛みを示す疾患に対し、有効な効果が得られたので報告する。

対象症例および疼痛のタイプ

- 外科手術後の症例（急性期疼痛）
- 変形性脊椎症などの関節疾患による痛み
（慢性期疼痛）
- 外傷などによる皮膚疾患などによる痛み

○腫瘍疾患による痛み（癌性疼痛）

○椎間板ヘルニアなどの脊髄疾患において生じる急性～慢性期疼痛

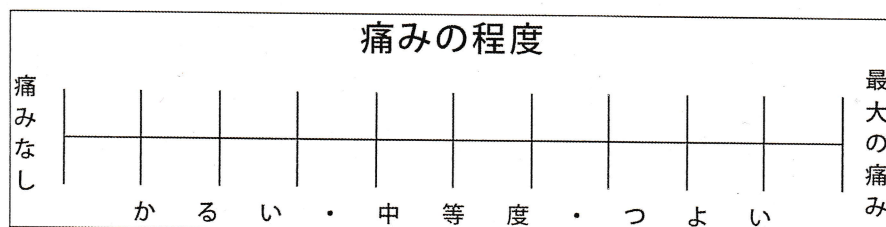
痛みについての評価

VAS（Visual analogue scale）を用いて治療開始からの数値で変化を記録した。痛みの測定法として患者に痛みの程度を（想像できる）最大の痛みを10、痛みなしを0として記録する。

問題点としては、個々の患者によって痛みの感じ方が異なるために、それぞれ相互に比較は困難であるが、一症例の治療前後での痛みの程度はよく反映していると考えられる。

結果

SRD-P401の投与量は25～100mg/kgとし、1日2回の経口投与を基本とした。18例を対象に症状、疾患、およびその疾患の状況に応じて用量を適宜増減した。



動物種	年齢	雌雄	疾患	効果 (VAS)	副作用	併用薬及び処置
シーザー	6 Y	♀	指間性膿皮症 (痛みを伴う)	2 → 0	なし	抗生物質 ダームワン
M ダックス	10 Y	♀	膝蓋骨内方脱臼 (後肢跛行伴う)	6 → 0	なし	なし
柴犬	11 Y	♀	前肢腫瘍摘出	術後 → 3	なし	抗生物質、 レーザー照射
キャバリア	5 Y	♂	前肢跛行	4 → 1	なし	なし
マルチーズ	8 Y	♀	膝蓋骨内方脱臼 (後肢挙上伴う)	5 → 2	なし	なし
M ダックス	12 Y	♂	椎間板ヘルニア	5 → 2	嘔吐	ビタミン剤
ミニピン	3 Y	♂	前肢裂傷	5 → 0	なし	抗生物質
シェルティー	14 Y	♀	関節リュウマチ 膿皮症	8 → 6 (経過観察中)	なし	抗生物質
日本猫	13 Y	♂	去勢 (停留睪丸)	術後 → 1	なし	抗生物質
ポメラニアン	2 Y	♂	去勢 (停留睪丸)	術後 → 0	なし	抗生物質
チワワ	6 Y	♂	去勢	術後 → 3	なし	抗生物質 ジルケーン
バーニーズ マウンテン ドック	10 Y	♂	耳血腫	7 → 1	なし	抗生物質、 血腫除去後、 ケナコルト注入
日本猫	16 Y	♂	去勢	術後 → 0	なし	抗生物質
A. コッカー	6 Y	♂	去勢	術後 → 0	なし	抗生物質
日本猫	9 Y	♀	避妊	術後 → 0	なし	抗生物質
ビーグル	11 Y	♀	腫瘍摘出 (眼周囲)	術後 → 4	なし	抗生物質
柴犬	5 Y	♂	交通事故、 肝機能障害、緑内障	7 → 3	なし	抗生物質、 強肝剤、点眼薬
ラブラドル レトリバー	8 Y	♀	軟骨肉腫	10 → 9 (経過観察中)	なし	放射線療法

考 察

整形外科、術後、腫瘍疾患などでは消炎、鎮痛を目的に NSAIDs が一般的に使用されている。これらの服用で効果はみられるものの長期使用において消化管障害が発現することがあり、治療に難渋することが多いなか、今回各種疾患で発現する炎症や疼痛に対し、効果に差はあるものの SRD-P401 の使用で概ね良好な反応が得られた。避妊や去勢手術後の疼痛に関しては、同様の手技でも、本人の性格、エリ

ザベスカラーの装着などにより疼痛の確認に困難を極める場合もあるが、特にこのような術後疼痛および慢性化した疼痛、不快を伴う疾患に対しては 25 mg/kg BID 投与で NSAIDs 同様の有効性が確認された。免疫介在性疾患や腫瘍性疾患に対しても 50~100 mg/kg BID と前者よりも高用量の投与において病種や状態により他の治療との併用も可能であると思われる。今後も症例数を増やし有効性を確認していきたいと考えている。